

研 究

産後3か月における母親意識の構造と
育児状況に関する要因との関連

榮 玲 子

【論文要旨】

産後3か月の母親107名を対象に、子どもに対する母親としての役割や子育てにおける気持ちである母親意識の構造を明らかにし、その構造と育児状況との関連を検討することを目的として、質問紙調査を行った。

母親意識の因子分析による検討から5因子が抽出され、否定的な意識を示す『制約感』、『不安定感』、『心身疲労』と肯定的な意識を示す『母親肯定・子ども至上感』、『自己成長感』が見出された。また、その因子構造と母親が置かれている育児状況との関連を検討し、母親の年齢と就労状況、家族形態、夫へのサポート期待、子どもに関する心配といった要因が、単独あるいは複雑に関係して母親意識に影響していることが明らかになった。

Key words : 産後3か月, 母親, 母親意識, 因子構造, 育児状況

I. はじめに

核家族化, 少子化が進む現代社会において、子育てをしている母親が置かれている状況は著しく変化している。今日では子育てにおける役割を父親も含めた家族の役割として捉えるようになってきているが、子育てにおける母親の負担は大きく、母親の育児不安や育児ストレスに関する研究が行われている。従来の子育てに関する研究では、育児不安や育児ストレスに焦点を当て、育児者である母親の気質や性格、心理状態との関連やソーシャルサポートとの関連に注目したものが多く^{1)~6)}、母親が置かれている育児状況の実態や育児中の母親がもつ意識との関連を明らかにしたものは少ない。

子どもとの関係を考えると、母親が子どもの

個性を会得し、子どもの注視・発声・微笑といった行動により児とのコミュニケーションが可能となるのが産後3~4か月頃であり、母親が分娩後「赤ちゃんのいる生活」としてペースがつかめてくるのは、平均2.8か月であるといわれる⁷⁾。しかし、産後の抑うつが産後3か月前後でピークになること⁴⁾⁸⁾、また、自分のための時間がないことや、子どもの世話のために家事を思うように行うことができないことへの負担感があること⁹⁾も指摘されている。したがって、産後3か月頃には、母親が置かれている育児状況に関係した子育てにおける問題が生じやすく、母親の意識にも影響するのではないかと考える。

そこで、本論文では、産後3か月を経過した子育てをしている女性が母親であることをどの

Association between Structure of Motherly Consciousness and Childcare
Situations at the Point of Three Months after Birth

[1761]

Reiko SAKAE

受付 05.10.31

採用 06. 2. 9

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 (助産師/教育・研究職)

別刷請求先: 榮 玲子 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1

Tel: 087-870-1253 Fax: 087-870-1204

ように認識しているのか, 子どもに対する母親としての役割に関する気持ちや子育てにおいて生じる親の気持ちを「母親意識」として, 産後3か月における母親意識の構造を明らかにする。さらにこの母親意識の構造と母親が置かれている育児状況との関係を検討する。

II. 研究方法

1. 対象と調査方法

対象は, 出産経験や育児経験, 子どもとの関係が母親意識に影響する可能性のあることから, 初めて子育てをしている母親である。妊娠期から産後1か月までの継続調査に同意・協力が得られている114名に対し, 出産後3か月目に調査票を送付し, 郵送調査を行った。

2. 調査時期

平成15年6月～平成16年5月

3. 調査内容

対象である母親の年齢や就労状況, 家族形態, 夫へのサポート期待の有無, 子どもに関する心配の有無など育児状況に関する情報および母親意識に関する質問項目である。母親意識に関する調査は, 先行研究⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾での質問項目を参考に, 母親であることの受容の姿勢, 子どもに関する感情, 育児に対する気持ち, 日常生活などの視点から構成した40項目を作成し, 「全く違う」(1点) から「全くそうである」(5点) までの5段階評価とした。

4. 倫理的配慮

研究のための調査に先立ち産婦人科医院3施設の院長に研究目的, 方法, 意義, 守秘義務について説明し, 研究協力への承諾を得た。

研究対象には, 継続調査を依頼する時点で研究の概要, プライバシーの保護, 研究協力は任意であることを依頼書にて口頭で説明し同意を得た。また, 研究協力および協力拒否は可能であること, 協力の有無により健康診査やケアを受けるうえでの不利益は被らないこと, 収集したデータは研究目的以外では使用しないこと, 特定の個人的情報が遺漏しないよう処理する旨を説明した。

5. 分析方法

統計解析には, 統計ソフトSPSS12.0J for Windowsを用い, 一元配置分散分析, χ^2 検定, 因子分析(主因子法, プロマックス回転), 信頼性分析(Cronbachの α 係数からみた内的整合性)を行った。また, 母親の年齢と就労状況, 家族形態, 夫へのサポート期待, 子どもに関する心配の5要因との関連は, 因子分析で抽出された因子得点を従属変数として2要因分散分析を行った。なお, 就労状況は, 育児休業中であっても仕事を持っていることが子育てに影響すると考え, 就労に育児休業中の者も含めて分析した。

III. 結果

1. 対象の背景

有効回答が得られたのは107名, 回収率は93.9%であった。対象の背景は表1に示した。全対象の平均年齢は29.0歳, 育児休業中の者も含め就労している対象は32名(29.9%)であった。また, 家族形態は核家族88名(82.2%), 複合家族19名(17.8%)であった。なお, 全対象107名の産婦人科医院3施設における内訳は, A医院57名(53.3%), B医院36名(33.6%), C医院14名(13.1%)であり, 平均年齢, 就労状況, 家族形態, 夫へのサポート期待, 子どもに関する心配については, 3施設で差がみられなかった。

2. 母親意識の構造分析

産後3か月における母親意識を質問した40項目に対して, 因子分析, 信頼性分析を行った。その結果, 固有値1.0以上, 累積寄与率52.31%, 因子負荷量0.48以上を解釈し, 5因子を抽出した。Cronbachの α 係数は0.753で内的整合性が認められた。産後3か月における母親意識の構造を表2に示した。

第I因子は「25. 自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる」, 「29. 我慢していることが多い」など10項目で『制約感』と命名した(α 係数=0.814)。第II因子は「40. 母親であることが好きである」, 「19. 子どものためなら何でもできる」など11項目で『母親肯定・子ども至上感』と命名した(α 係数=0.756)。第

表1 対象の背景

項 目	全対象 (n=107)	A医院 (n=57)	B医院 (n=36)	C医院 (n=14)	p値
平均年齢	29.0歳 (21~40歳)	28.2歳 (21~39歳)	30.0歳 (22~40歳)	28.5歳 (21~37歳)	0.169
就労状況					
就労 ^{*1)}	10(29.9%)	19(33.3%)	9(25.0%)	4(28.6%)	0.689
非就労	75(70.1%)	38(66.7%)	27(75.0%)	10(71.4%)	
家族形態					
核家族	88(82.2%)	47(82.5%)	29(80.6%)	12(85.7%)	0.917
複合家族	19(17.8%)	10(17.5%)	7(19.4%)	2(14.3%)	
夫へのサポート期待					
あり	67(62.6%)	37(64.9%)	22(61.1%)	8(57.1%)	0.843
なし	40(37.4%)	20(35.1%)	14(38.9%)	6(42.9%)	
子どもに関する心配					
あり	73(68.2%)	38(66.7%)	26(72.2%)	9(64.3%)	0.807
なし	34(31.8%)	19(33.3%)	10(27.8%)	5(35.7%)	

注：*1) 育児休業中も含む

平均年齢は一元配置分散分析，他は χ^2 検定を実施

Ⅲ因子は「31. なんとなく気分がのらないことが多い」, 「35. 気持ちが落ち着かない」など6項目で、『不安定感』と命名した (α 係数=0.911)。第Ⅳ因子は「5. 母親になると自分はすてきな女性になる」, 「7. 母親になると自分の表情は豊かになる」など5項目で『自己成長感』と命名した (α 係数=0.805)。第Ⅴ因子は「24. からだが疲れている」, 「37. なんとなくからだがスッパリしない」など4項目で『心身疲労』と命名した (α 係数=0.778)。

3. 育児状況と母親意識との関係

母親が置かれている育児状況の違いが，母親意識にどのように関係しているかを分散分析により検討した。育児状況は母親の年齢と就労状況，家族形態，夫へのサポート期待，子どもに関する心配の5要因から2次元の組み合わせを要因とした2つの独立変数を設定し，母親意識の構造分析で見出された5因子それぞれの因子得点を従属変数とした。

1) 第Ⅰ因子『制約感』に影響する要因

夫へのサポート期待に主効果 ($F=(1,103)$

5.47, $p<0.05$], 就労状況と夫へのサポート期待の2要因に交互作用が認められた [$F=(1,103)$ 8.08, $p<0.01$]。図1から解釈すると，自分の関心が子どもばかりに向き，我慢していることが多いという制約感は，夫へのサポート期待のある母親では，就労の母親が非就労より高く ($p<0.01$)，就労の母親でもサポート期待のない者では低かった ($p<0.01$)。また，家族形態と夫へのサポート期待の2要因にも交互作用が認められた [$F=(1,103)$ 6.23, $p<0.05$]。図2に示すように，核家族では，夫へのサポート期待のある母親がない者より制約感は高く ($p<0.05$)，夫へのサポート期待があっても複合家族では低かった ($p<0.05$)。

2) 第Ⅱ因子『母親肯定・子ども至上感』に影響する要因

家族形態の要因に主効果のみが認められた [$F=(1,103)$ 6.96, $p<0.01$]。母親である自分自身を肯定し，子どものためなら何でもできるという母親肯定・子ども至上感は，複合家族の母親が核家族よりも高かった。

表2 産後3か月における母親意識の構造

n=107

項 目	因子負荷量					共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III	IV	V			
I 制約感 (10項目, $\alpha=0.814$)								
25. 自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる	0.761	-0.331	0.327	-0.280	0.365	0.587	2.66	1.05
29. 我慢していることが多い	0.756	-0.285	0.376	-0.232	0.365	0.614	2.79	0.93
32. 毎日同じことを繰り返している	0.752	-0.371	0.353	-0.423	0.350	0.595	3.38	1.12
17. 自分は母親として適していない	0.701	-0.324	0.215	-0.346	0.349	0.650	2.09	0.77
9. 子どもがいると自分の思いどおりにできない	0.687	-0.395	0.319	-0.164	0.306	0.507	3.09	1.07
30. 母親になると世間から取り残される	0.636	-0.369	0.379	-0.204	0.150	0.475	2.33	1.08
2. 子どもができてと楽しみや趣味がもてない	0.634	-0.322	0.378	-0.249	0.300	0.430	2.64	0.98
12. 自分は妻として適していない	0.592	-0.288	0.299	-0.352	0.327	0.491	2.27	0.80
39. 育児に自信がある	-0.571	0.241	-0.167	0.360	-0.215	0.575	2.86	0.91
6. 子どもができてと夫との会話が少なくなる	-0.545	-0.083	0.205	-0.297	0.248	0.388	2.13	1.04
II 母親肯定・子ども至上感 (11項目, $\alpha=0.756$)								
40. 母親であることが好きである	-0.304	0.725	-0.294	0.328	-0.307	0.552	4.19	0.66
18. 育児は嫌いだ	0.324	-0.687	0.369	-0.387	0.306	0.584	1.66	0.81
19. 子どものためなら何でもできる	-0.171	0.681	-0.349	0.321	-0.251	0.527	4.24	0.88
20. 子どもこそ生きがいである	-0.109	0.680	-0.308	0.337	-0.208	0.561	3.81	1.04
1. 育児は好きだ	-0.346	0.679	-0.352	0.420	-0.299	0.532	4.00	0.77
34. 育児は楽しい	-0.313	0.658	-0.326	0.221	-0.351	0.479	4.10	0.72
38. 母親として活動しているときが自分らしいと思う	-0.381	0.656	-0.312	0.290	-0.294	0.470	3.41	0.82
16. 母親であることに充実感を感じる	-0.232	0.654	-0.342	0.365	-0.221	0.516	4.36	0.71
26. 子どもに一番の関心がある	-0.293	0.588	-0.220	0.367	0.043	0.465	4.19	0.77
10. 育児は苦しい	0.353	-0.578	0.320	-0.340	0.527	0.497	2.07	0.86
23. 子どもはいいらしい	-0.349	0.555	-0.399	0.331	-0.201	0.350	4.77	0.41
III 不安定感 (10項目, $\alpha=0.911$)								
31. なんとなく気分がのらないことが多い	0.363	-0.317	0.788	-0.342	0.243	0.715	2.34	0.98
35. 気持ちが落ち着かない	0.396	-0.369	0.769	-0.387	0.213	0.657	2.13	0.91
28. やる気が起きなくなった	0.383	-0.300	0.742	-0.352	0.375	0.604	2.06	0.84
22. 気分転換できない	0.408	-0.355	0.728	-0.305	0.308	0.627	2.29	0.96
13. 毎日なんとなくイライラする	0.306	-0.406	0.728	-0.394	0.381	0.642	2.14	0.92
21. 子どものために活動が制限されてつまらない	0.393	-0.367	0.726	-0.173	0.325	0.613	2.31	0.86
36. 何を考えているのかわからなくなることがある	0.399	-0.316	0.702	-0.374	0.242	0.553	1.92	0.88
14. 気分がふさいで人と話すがいやになっている	0.283	-0.340	0.701	-0.265	0.346	0.522	1.71	0.68
3. 毎日なにかものたりない	0.350	-0.394	0.662	-0.218	0.216	0.512	2.17	1.01
33. 子どもよりも自分に関心がある	0.189	-0.330	0.480	-0.331	0.112	0.289	2.00	0.75
IV 自己成長感 (5項目, $\alpha=0.805$)								
5. 母親になると自分はすてきな女性になる	-0.312	0.409	-0.387	0.710	-0.328	0.545	3.34	0.81
7. 母親になると自分の表情は豊かになる	-0.299	0.381	-0.335	0.698	-0.172	0.522	3.90	0.79
11. 母親になると人間的に成長できる	-0.192	0.245	-0.294	0.667	-0.234	0.494	4.04	0.80
4. 母親になると気持ちが安定して落ち着く	-0.386	0.311	-0.387	0.597	-0.345	0.459	3.69	0.85
15. 自分は女性に生まれてきてよかった	-0.385	0.333	-0.376	0.541	-0.139	0.409	4.37	0.72
V 心身疲労 (4項目, $\alpha=0.778$)								
24. からだが疲れている	0.381	-0.293	0.300	-0.197	0.768	0.599	3.37	0.98
37. どことなくからだがスッキリしない	0.323	-0.282	0.316	-0.331	0.741	0.610	2.86	1.10
8. 睡眠不足になり考えがまとまらなくなる	0.345	-0.319	0.386	-0.393	0.607	0.459	2.26	0.93
27. 自分の思うとおりに毎日の生活をしている	-0.310	0.394	-0.303	0.178	-0.418	0.252	3.14	1.00
固有値	14.01	2.65	1.83	1.30	1.12			
寄与率(%)	35.02	6.63	4.58	3.25	2.81			
累積寄与率(%)	35.02	41.65	46.49	49.49	52.31			

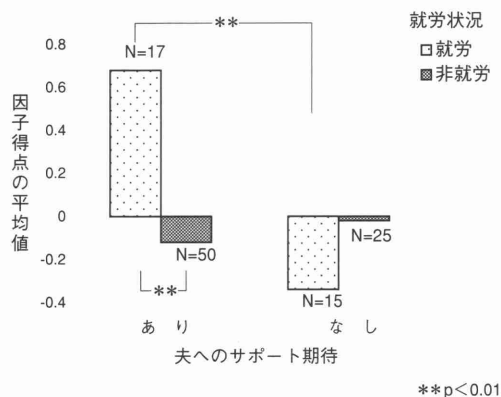


図1 第Ⅰ因子『制約感』に影響する要因
就労状況×夫へのサポート期待

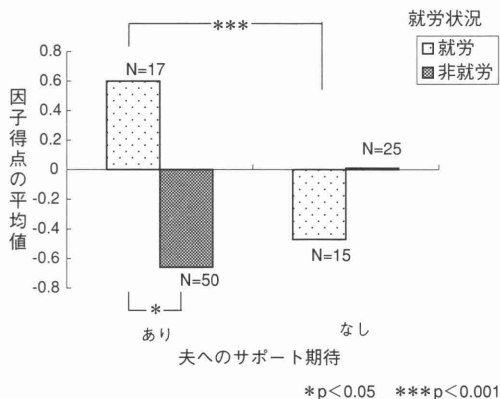


図3 第Ⅲ因子『不安定感』に影響する要因
就労状況×夫へのサポート期待

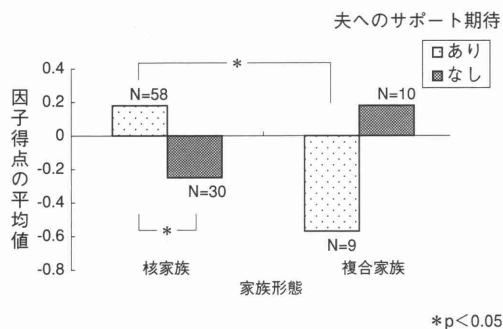


図2 第Ⅰ因子『制約感』に影響する要因
家族形態×夫へのサポート期待

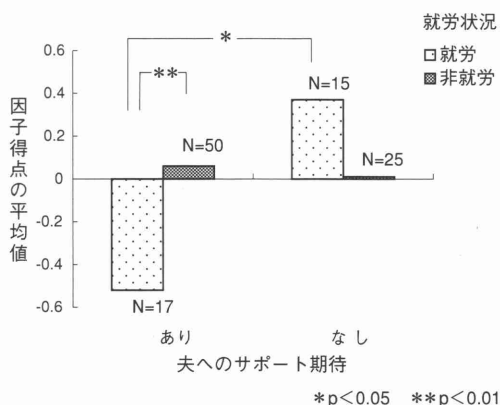


図4 第Ⅳ因子『自己成長感』に影響する要因
就労状況×夫へのサポート期待

3) 第Ⅲ因子『不安定感』に影響する要因

夫へのサポート期待に主効果 [$F=(1,103)$ 6.41, $p<0.05$], 就労状況と夫へのサポート期待の2要因に交互作用が認められた [$F=(1,103)$ 8.41, $p<0.01$]. 図3から解釈すると, 気分がのらず気持ちが落ち着かないという不安定感, 夫へのサポート期待のある母親では就労の者が非就労より高く ($p<0.05$), 就労の母親でも夫へのサポート期待のない者では低かった ($p<0.001$).

4) 第Ⅳ因子『自己成長感』に影響する要因

夫へのサポート期待に主効果 [$F=(1,103)$ 4.75, $p<0.05$], 就労状況と夫へのサポート期待の2要因に交互作用が認められた [$F=(1,103)$ 6.07, $p<0.05$]. 図4から解釈すると, 母親となり自分自身が人間的に成長したという認識は, 夫へのサポート期待がある母親では, 就労の者が非就労より低く ($p<0.01$), 就労

の母親でもサポート期待のない者では高かった ($p<0.05$). また, 母親の年齢 [$F=(1,103)$ 7.41, $p<0.01$] と子どもに関する心配 [$F=(1,103)$ 4.46, $p<0.05$] にそれぞれ主効果が認められた. 29歳以下の比較的年齢の若い母親や子どもに関する心配のない母親において自己成長感が高かった.

5) 第Ⅴ因子『心身疲労』に影響する要因

夫へのサポート期待に主効果 [$F=(1,103)$ 4.27, $p<0.05$], 就労状況と夫へのサポート期待の2要因に交互作用が認められた [$F=(1,103)$ 7.04, $p<0.01$]. 図5から解釈すると, 身体が疲れすっきりしないという心身疲労は, 就労の母親のうち夫へのサポート期待のある者がいない者より高かった ($p<0.05$). また, 母親の年齢の要因に主効果が認められ [$F=$

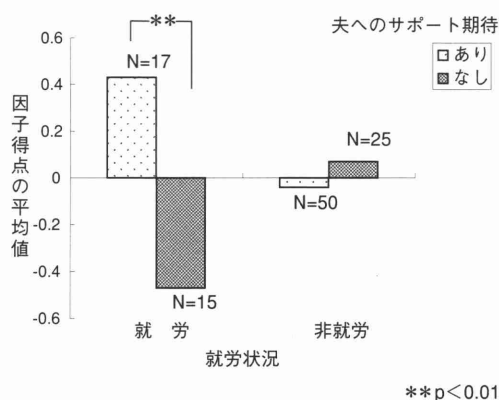


図5 第V因子『心身疲労』に影響する要因
就労状況×夫へのサポート期待

(1.103) 6.67, $p < 0.01$], 30歳以上の比較的年齢の高い母親が心身疲労の高いことが示された。

IV. 考 察

1. 母親意識の構造と特徴

産後3か月における母親意識の構造は、5因子から構成されていた。この5因子は、大きく2つに分けて捉えることができた。ひとつは、母親となったことで日常生活が変化し、子どもがいることで制約を感じることや、不安定で落ち着かない気持ちや疲労感があるといった否定的な意識を示す『制約感』、『不安定感』、『心身疲労』である。もうひとつは、母親になった自己を肯定し子どものためなら何でもできると感じることや、人間としての成長を感じるといった肯定的な意識を示す『母親肯定・子ども至上感』、『自己成長感』である。

因子構造の特徴をみると、説明力の大きい第I因子で『制約感』が見出され、産後3か月の母親は、育児の負担感や自信のなさ、子どもの存在によって自分の視野や行動が制限され我慢を強いられているといった否定的な意識を強く示していた。少子化や核家族化に伴い、母親の多くは子どもの少ない核家族で育ち、乳児との接触がないまま母親になっているという現状¹²⁾や育児への自信や母親としての自覚は3・4か月以降に示される⁹⁾との報告があるように、育児への自信がなく子どもばかりに関心を向け、身体や気持ちを休めることができない状況が意

識に影響したと考えられる。また、説明力は小さいものの第III因子で『不安定感』、第V因子で『心身疲労』が見出され、産後3か月の母親は、情緒的な不安定さや心身の疲労を感じながら子育てをしているという状況も窺えた。久坂ら¹³⁾は、子どもの誕生を契機とした親となる意識として、自己の人間としての成長感、子どもの将来を考え親となっていく役割意識、親となっていくことによる制約感の3つの側面が存在することを報告している。本研究の対象においても、母親となったことでの制約感や不安定感、心身疲労を感じる反面、母親となった自己を肯定し子どもを最重要とする気持ちや自己の成長を意識する気持ちである『母親肯定・子ども至上感』や『自己成長感』の存在が示された。

2. 母親意識に影響する状況的要因

本研究では、母親の年齢と就労状況、家族形態、夫へのサポート期待、子どもへの心配といった母親が置かれている育児状況の違いが、産後3か月の母親における母親意識にいかに関係しているかを検討した。その結果、育児状況それぞれの要因が、単独あるいは複雑に関係して母親意識に影響していることが明らかになった。

否定的な意識を示す『制約感』、『不安定感』、『心身疲労』には、母親の就労状況と夫へのサポート期待が関係することが示された。つまり、仕事をもち夫へのサポート期待のある母親は、これらの否定的な意識が高いことが認められた。これは、仕事との両立という生活において、母親が子どもの父親である夫に育児の支援者として期待しているものの、満足のいくサポートが得られないことから、子育てにおける制約感や疲労感、情緒の不安定さを感じているのではないかと考えられる。また、核家族で夫へのサポート期待のある母親では、『制約感』の高いことが示された。核家族では身近にいる夫にサポートを期待しているものの、夫の非協力や不十分な支援は、子ども以外への関心を示しにくく我慢するという状況が生じ、否定的な意識を強く感じていることが推察された。

また、『心身疲労』は30歳以上の比較的年齢の高い母親が強く意識していることが示され、

子育てにおける体力不足や体調不良の生じやすい状況にあることが窺えた。

肯定的な意識を示す『母親肯定・子ども至上感』、『自己成長感』には、それぞれ異なる要因が関係することが示された。まず、『母親肯定・子ども至上感』には家族形態が関係し、複合家族で高いことが示された。祖母をはじめとする支援者のいる複合家族では、注視・発声・微笑といった3か月頃の子どもの行動や反応を受け止め子どもとの生活を楽しむ余裕のあること、支援者が母親としての役割モデルとしてすぐ身近にいることが関係していると考えられる。しかし、複合家族で暮らす母親は、核家族の母親に比べ支援者が多く、家庭での役割も多岐にわたり、自分にとっての育児の価値を実感しにくい状況にあるとの指摘⁶⁾もあり、母親の家庭における役割との関係も検討していく必要がある。次に、『自己成長感』には、母親の年齢や就労状況、夫へのサポート期待、子どもに関する心配が関係することが示された。仕事をもつ母親では夫へのサポート期待のない者が自己成長感が高く、仕事と育児の両立を成し遂げることで自己の成長を意識していることが窺われた。専業主婦では、夫へのサポート期待はあるものの、母親になったことで自己の成長を強く意識していた。専業主婦は閉鎖的で孤独な空間に引きこもりやすく社会参加が少ないために、アイデンティティ喪失への懸念が高まるといわれる⁵⁾。しかし、逆に専業主婦は、母親となり子育てをすることで自分自身の存在価値を見出し、自己成長感を高めていることが推察された。また、29歳以下の比較的年齢の若い母親や子どもに関する心配事のない母親において自己成長感の高いことが示された。比較的年齢の若い母親は、否定的な意識である『心身疲労』も低く、3か月児にみられる注視・発声・微笑といった子どもの行動や反応から子どもへの愛着を高めるとともに、母親となった自分に満足し、より自己の成長を意識することが考えられる。また、子どもへの心配がない母親は、子どもが順調に成長していることで現在までの育児に満足し、育児への自信も生まれ、母親としての自己の成長を強く感じていることが窺えた。

本研究は初めて子育てをしている産後3か月

の母親を対象としたが、出産・子育ての経験や子どもの成長・発達に伴い母親意識やその意識に関係する要因が変化すると考えられることから、継続的に検討する必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただいたお母様方、院長ならびにスタッフの皆様に深謝申し上げます。また、ご指導を賜りました鳴門教育大学学校教育学部橋本俊顕教授に深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 大日向雅美. 育児に伴う母親の不安. 小児看護 1989; 12: 415-420.
- 2) 牧野カツコ. 〈育児不安〉概念とその影響要因についての再検討. 家庭教育研究所紀要 1989; 10: 23-31.
- 3) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 他. 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究 1994; 64: 409-416.
- 4) 武田 文, 宮地文子, 山口鶴子, 他. 産後の抑うつとソーシャルサポート. 日本公衆衛生雑誌 1998; 45: 564-571.
- 5) 清水嘉子, 西田公昭. 育児ストレス構造の研究. 日本看護研究学会雑誌 2000; 23(5): 55-67.
- 6) 清水嘉子. 母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係. 小児保健研究 2003; 62: 558-568.
- 7) 片桐麻州美. 効果的な産褥家庭訪問の確立に向けて—母親99人の調査から—. 助産婦雑誌 1996; 50(10): 42-45.
- 8) Kumer R, Robson KM. A prospective study of emotional disorders in childbearing women. British Journal of Psychiatry 1984; 144: 35-47.
- 9) 池田浩子. 育児負担感に関する研究—育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連—. 母性衛生 2001; 42: 607-614.
- 10) 大日向雅美. 母性の研究. 東京: 川島書店, 1998: 7-169.
- 11) 松村恵子. 母性意識の構造と発達. 第1版. 東京: 新興交易医書出版部, 1999: 59-157.
- 12) 榊原洋一. 育児不安. こころの科学 2002; 103: 29-35.
- 13) 久坂ヤス子, 澤田忠幸, 豊田ゆかり, 他. 親となる意識の形成. 愛媛県立医療技術短期大学紀

要 1999 ; 12 : 37-43.

[Summary]

This study analyzed the structure of motherly consciousness by means of questionnaire surveys. It examined the relationships between the structures and the caregivers' social situations for child-rearing. A questionnaire survey of 107 mothers was conducted in the three months after childbirth to grasp their motherly consciousness about maternal roles toward children and feelings in childcare.

Five factors, which were termed "feeling of restriction", "emotional instability", and "mind-and-body fatigue" which show negative

consciousness, and "sense of affirmation of mother/sense of children for children's sake", and "sense of one's own growth" which show positive consciousness, were noted through factor analysis. Moreover, the factor scores were concerned with the child-rearing situations, such as mother's age, job style, family style, support expectation by husband, and existence of a mother's uneasy child.

[Key words]

Three months after childbirth, Mother, Motherly consciousness, Factor structure, Child-rearing situation